

医療廃棄物

最終処分場まで追跡

手稲溪仁会病院

来春システム導入

医療法人溪仁会(札幌市)や財団法人北海道科学技術総合振興センター(ノーステック財団、同市)は、注射針など医療廃棄物の処理を最終処分場まで追跡管理するシステムを開発した。廃棄物の不法投棄が後を絶たない中、管理の徹底で信用度を高められるうえ、コスト削減も見込める。手稲溪仁会病院(同市)が来春に導入。道内外の医療機関にも売り込む。

コスト削減、外販も

システム開発のエルムデータ(同市)も開発に参加した。IT(情報技術)で医療廃棄物の処分を管理するのは道内で初めてという。

注射針やガーゼ、包帯といった医療廃棄物は病気になる危険があり、焼却などの処分が義務付けられている。同病院は運送会社のエア・ウォータ―物流(同市)に引き渡し、廃棄物処理のメディカル・セフティ・システム(空知管内上砂川町)で処分し、燃料の炭としてリサイクルする。注射針など廃棄物を入れた箱のバーコードを読み取り、荷物の重さに変化がないか、指示通りに引き渡したかどうかを確

バーコードを使い、医療廃棄物の処分管理を徹底する

認できるようにする。運搬車の経路は全地球測位

システム(GPS)で把握し、ドアの開閉も含めパソコンの地図画面に映し出す。

同病院で発生する医療廃棄物は年五百二十ト。すでに八割弱の四百トをリサイクルしており、八月中に全量リサイクルできるようにし、来春から

の追跡管理に備える。同病院が負担するシステム費用は年三百万―四百万円。

責任(CSR)として環境配慮を打ち出せば、患者からの信用力向上につながる。このほか

調べることで、一箱に無駄なく廃棄物を詰め、処理費用の圧縮にもつなげたい考えだ。

高齡化で医療廃棄物は増えている。道によると、道内での発生量(二〇〇二年度)は一万四千六百五十八ト。前回調査(一九九八年度)に比べ三割

増えた。医療機関や運搬会社が処理費用を浮かせるため、山間部などに不法投棄する例も多い。